

『風に紅葉』続補遺

大倉 比呂志

二〇一二年一〇月に鈴木泰恵との共編著『校注 風に紅葉』を新典社から刊行したが、その後『風に紅葉』に関して、

I 『恋路ゆかしき大将』と『風に紅葉』との類似性を中心に」(『学苑』二〇一三・8)

II 『風に紅葉』における〈精進落とし〉の記事をめぐっての断章―『源氏物語』撰取の新たな技―」(『狭衣物語 文の空間』所収 翰林書房 二〇一四・5)

III 『風に紅葉』補遺」(『学苑』二〇一四・8) の愚考を發表した。本稿はIIIに続いて、新たに気が付いた点を取り上げたものである。

ちなみに、注釈書類に関しては以下のような略記号を用いた。

A 辛島正雄「校注『風に紅葉』―巻一―」(『文学論輯』第三十六号 一九九〇・12)

B 辛島正雄「校注『風に紅葉』―巻二―」(『文学論輯』第三十七号 一九九二・3)

C 関恒延『風に紅葉 依拠物語 本文 総索引』(教育出版 一九九九・1)

D 中西健治校訂・訳注『風に紅葉』(中世王朝物語全集15所収 笠間書院)

二〇〇一・4)

なお、『風に紅葉』の本文は前述の共編著により、算用数字は巻、漢数字は該当ページを示す。

(巻一)

〈1〉「輪廻の業」― 序文

「輪廻」ということは、例えば『平家物語』に一例あると記載されているもの^{注①}、『源氏物語』にはなく、多くの作品で使用されていること^{注②}とは考えにくい。

ところで、『風に紅葉』巻一序文に「輪廻の業」ということが、

① 風に紅葉の散る時は、さらでもものがなしきならひと言ひ置けるを、まいて
老いの涙の袖の時雨は晴れ間なく、苔の下の出で立ちよりほかは、何の営み
あるまじき身に、せめての輪廻の業にや、皆見聞きしこと、人の語りしこと、
そぞろに思ひ続けられて、問はず語りせまほしき心のみぞ出で来る。(1・11)

とあり、中世王朝物語では管見の及ぶ限り、『恋路ゆかしき大将』に、

②(端山ト女一宮トノ仲ハ) あぢきなくむつかしの世や。これも輪廻の業にこそあらんなれ。(巻五)

と用いられている。その他には、

③(嬬ノ) 返り事には、「略」人の心つけむことは、功德とこそなるべけれ。情をかけ、艶ならむによりては、輪廻の業とはなるとも、奈落に沈むほどのことやは侍らむ。(略) (今鏡・打聞第十・作り物語の行方)

④この今様を嗜み習ひて、秘蔵の心ふかし。さだめて輪廻業たらむか。(梁塵秘抄口伝集)

とあり、『日本国語大辞典』には、

⑤皆なすところは、ただ三途の輪廻の業なり。(百座法談〈天永元年〓一一一〇〉閏七月十一日)

⑥「人々を打ちける人をうらめしとおもひたまはば、瞋恚の妄執となりて、輪廻の業つくべからず。」(曾我物語・卷十一・母と虎、箱根へのぼりし事)

の二例が記載されているわけだが、『源氏物語』では使用されておらず、前述したいずれの例も院政期以降のものであり、「生死流転の原因となる悪業」(日本国語大辞典)の意であって、平安後期から中世にかけて使用されたことばであると考えられる。

注① 宮島達夫他編『日本古典対照分類語彙表』(笠間書院 二〇一四・6)。

② 「輪廻」の中古・中世の作品における使用例として、『日本国語大辞典』では『うつつは物語』(俊隆)、『文華秀麗集』(巻中)、『三宝絵』(下)、『苔の衣』(秋)が、『角川古語大辞典』では『今昔物語』(巻六)、『朝野群載』

(巻三)があげられているが、『梁塵秘抄』(巻二)にもある。

② 一 主人公の家系

主人公(以下、男君と称する)の父関白左大臣が初元結時代に結婚した「古き大臣の御女」(1・11―12)である北の方は若君(権中納言)を出産後、父親は女一宮を盗み出し、男君と姫君(宣耀殿女御。後に中宮)が誕生する。父親が北の方と疎遠になる件は、

①さるままには(注―男君の父親が北の方と疎遠になり、女一宮に夢中になること)、もとの上の御方(注―北の方)をさをさまれになりゆく。三条わたりに住み給ひしかど、今少し東に寄りて、京極わたりに玉鏡と磨きて、宮の上と住みつき給へるほど遠からねば、車の音、前駆の声も、さながら移りて聞こゆる、いかが(北の方)御胸安からむ。(1・12)

と語られているわけだが、傍線部はいわゆる「前渡り」^注と称される場面であり、『蜻蛉日記』中巻天禄二年(九七二)正月の件に、

②さて、年ごろ思へば、などにかあらむ、ついたちの日は見えずしてやむ世なかりき。さもやと思ふ心遣ひせらる。未の時ばかりに、さき追ひののしる。そそなど、人も騒ぐほどに、ふと引き過ぎぬ。……かくしも安からずおぼえ言ふやうは、このおしはかりし近江になむ文通ふ。さなりたるべしと、世にも言ひ騒ぐ心づきなさににけり。

とある記事をはじめとして、この後にも兼家の「前渡り」が数多く語られており、作者の念頭にはこの作品の存在があった可能性もある。

さらに、若君と北の方とが引き続いて死去するわけだが、父親に関して、

③(若君ト北の方トノ死去ヲ) あはれに心憂く思し嘆きしかど、まさる方(注一 女一宮)のいたはしさにや、(死去シタ二人ノコトヲ) 御言の葉にかけ給ふことだにまれになりゆく。あはれなるならひなりかし。(1・131)

と語られており、傍線部で父親の心移りが草子地の形で語られている。その根底には『源氏物語』桐壺巻であれば桐壺更衣の死を悲嘆した桐壺帝は、更衣と類似する先帝の四宮藤壺が入内すると、

④思しまぎるとはなけれど、おのづから(桐壺帝ノ) 御心(桐壺更衣カラ藤壺ニ) うつろひて、こよなう思し慰むるやうなるも、あはれなるわざなりけり。

と語られている傍線部の影響を蒙っていると考えられる。

注 「前渡り」に関しては、今井源衛「前渡り」について―源氏物語まで―(『中古文学』第十七号 一九七六・五)に詳しい。

③ 一〇 男主人公に対する太政大臣の梅見の宴への招待と北の方との関係

男君は父の兄太政大臣から「我が宿の籬の中の梅の花色も匂ひも誰か分くべき」(1・19)という歌が届けられ、自邸の紅梅が満開なので見に来てほしい旨の誘いを受ける。この歌には参考として『古今集』の「梅の花を折りて、人に贈りける／きみならで誰にか見せむ梅の花色をも香をもしる人ぞしる」(春上・三八・紀友則)が取り上げられているが(A)、『後撰集』にある歌「月のおもしろかりける夜、花を見て／あたら夜の月と花とおなじくはあはれ知れらん人に見せばや」(春下・一〇三・源信明)が、友則歌のごとく「梅の花」ではなく、信明歌では「花」(桜)とあるとこ

ろから問題はあるものの、後に「夕月夜の影はなやかにさし入りて」(1・21)とある点からすれば、「あたら夜の」という歌も「きみならで」の歌と同様に、参考歌として考えるべきではなからうか。

ところで、太政大臣は「例の常はまとはし給ふらん、とをかしくて」(1・19)と男君の心中思惟が語られているわけだが、なぜ太政大臣は頻りに男君を誘うのだろうか。太政大臣邸を訪れた男君に向かって、

①「翁、むげに近づきたる心地しはべるに、この人(注一北の方との間に生まれた小姫君)のむつかしきほだしにおぼえはべる。ものめかさばこそ世の聞こえも便なうはべるらめ、ただ候ふ人の列にて育ませ給ひなんや」(1・210)

と太政大臣が語っている背景には、自分は高齢だから、小姫君を男君の侍女(もしくは愛人)の一人として面倒を見てほしいという魂胆が^注あって、太政大臣は何度も男君に自邸に来るように声をかけていると考えられる。

その後、宴会が始まった件は、

②「御暗ひを宮仕ひ初めにも、それや」と大臣の上(北の方)に聞こえ給へば、……(1・210)

とあり、太政大臣が北の方に男君に酒をつぐように言っているのは、「先に『さぶらふ人の列にて』と云っていたのを承けて、姫君の宮仕えの手はじめとして、母親(私云一北の方)に手本を示すように言ったもの」(A)とする見解もあるが、傍線部は「お近付きのしるし」といった意味ではなからうか。

その宴会の最中に、太政大臣は「例の我しもとく酔ひ給ふ癖」があって、『むげに無礼にはべり』(以上、1・21)と断わって、その場から立ち

去った後に、次のような描写がある。

③女（北の方）の御気色近くてはいとど愛敬づき、をかしげにおはするに、酔ひ少し進みぬるまめ人（注―男君）の御心もいかがありけん。夕月夜の影はなやかにさし入りて、梅の匂ひもかごとがましきに、姫君の御新枕にはあらで、

あやしの乱りがはしさま。（1・211）

傍線部のこの情景は何のために語られているのだろうか。外は月の光が明かる過ぎるし、梅の匂いも強いので、それを口実にして早く室内に入ったことを推測させ、男君と北の方との間で繰り広げられる情交を暗示しているのではないのか。ちなみに、**[A]**は「ほろ酔い加減に、月影・梅の薫りと、情事を誘う条件が揃う」と指摘している。

さらに、情交後の描写として、

④ただ行きずりにだに鎮めもあへず、けしからぬならひの（北の方）御人様を
まして推し量るべし。男も、まだ知らずをかしう思されて、浅からざりける
契りのほどを語りひ給ふにも、……（1・211）

とあり、傍線部の「男」は一般的に情交を暗示するのに用いられる記号であるが、男君は北の方に魅力を感じただけではなく、今までこのような行きずりの情交の経験も少なく、上流層の年上の貴婦人とこのような関係になったことはなかったということが推測できよう。

注 **[A]**は「婉曲な結婚依頼である」と指摘している。

④ 一三 男主人公、梅壺女御たちを垣間見

三月、里下りした麗景殿女御をはじめ、梅壺女御、北の方、小姫君が楽器を演奏しているのを、宮中からの帰途、男君が垣間見する件は、

①左衛門督、簀子に候ふ。うち嘆きたる気色にて笛は吹きやみて、「竹河の橋の詰なる」と唱ひすさみて、「思ひやみぬる」など独りごちて出でぬるに、……（1・241―25）

と語られている。男君に北の方を奪われた左衛門督はぼつねんと催馬楽「竹河」を口ずさんでいるが、その「竹河」は、

②竹河の 橋の詰なるや 橋の詰なるや 花園に はれ 花園に 我をば放て
や 少女たぐへて

という内容である。「北の方を大将（私云―男君）に奪われた左衛門督の、多分に自虐的な気分が看取される」**[A]**わけだが、傍線部に注目すると、「御簾の中の女性に、あなたを伴わたいこうと思うのだと、からかいかけているよう」で「一人女をわたしにくれ、と言っているわけだ」と解釈注されているごとく、男君に傾いた北の方の代わりに小姫君を自分に与えてほしいと暗示しているのではなからうか。とすれば、男君に与えられそうになった小姫君を左衛門督が奪うことにより、左衛門督と関係のあった北の方が男君になびき、北の方を奪われた鬱憤をはらせると考えて、左衛門督は「竹河」を口ずさんだのではなからうか。

ちなみに、『源氏物語』竹河巻においては、薫が故鬚黒大臣の姫君たちを念頭に置いて故大臣の息藤侍従に、前述の「竹河」を取り入れ、「竹河

のはしうち出でしひとふしに深き心のそこは知りきや」の歌を詠んだことが語られている。

注 鑑賞日本古典文学第四巻歌謡Ⅰ（角川書店 一九七五・5）。

〈5〉 一五 宣耀殿女御、皇子出産

宣耀殿女御が皇子を出産し、東宮が急いで行啓するわけだが、東宮がその皇子の顔を凝視する件は、

（東宮ハ皇子ヲ）ことごとなくまもりきこえさせ給ひて、ほほゑませ給ふものから、御涙の浮きぬるを、大将（男君）は御佩刀持ちて候ひ給ふが、（東宮ガ）老人のやうに、とをかくし見きこえ給ふ。（1・二二〇）

と語られている。傍線部に関して、東宮が初対面の皇子に対してほほ笑んだのは、誕生したのが皇子であるため、自分が即位した暁には、その皇子が東宮の位に就き、将来的には即位する可能性が大きいところから、自分の血脈を継承させることができるという安堵感と、東宮にとっては初めての子供であり、母子ともに安泰であるので、嬉しさの余り老人のように顔をくしゃくしゃにして涙を流していると理解されよう。ちなみに、「涙もろいのが」〔A〕老人の特徴で、東宮が老人のように涙もろく泣いているとするのは、やや説明不足と思われる。

〈6〉 一八 承香殿女御のこと

承香殿女御のもとには父故式部卿宮から譲られた多くの漢籍があるので、男君は縁故を頼って見せてほしい旨を申し込んだところ、承香殿女御から

快諾を得ると同時に、

「文どもはさるることにて、異なる秘事、御みづからならでは」とて、唐めいた箱の封つきたるを開けて（男君ガ）見給へば、白き薄様に、

①「書き付くる昔の跡のなかりせば思ふ心は知らせまじやは」
また、

②「いかにせん見るに苦しき君ゆゑに心は身にも添はずなりゆく

たよりもあらずあさまじうこそ」と書かれたる墨つき、筆の流れ、今の世の上手と聞こゆる御手なれば、……（1・二九―三〇）

と承香殿女御から二首の歌が贈られたことが語られている。傍線部の解釈は、

○あなたの依頼を方便にして、ずがる恋にした訳でもありませんの。（C）

○使者でもないのに、『文』によせてあなたに心を届けるなんて、あきれたことですね。（D）
と訳されているが、

◎書物にかこつけてあなたへの思いを述べるのはふさわしいことではないのに、こんな思いを申し上げることは、我ながらあきれてしまうことですが。

と訳すべきだろう。というのは、「たより」には「①手づる。縁故。寄るべ。②ついで。よい機会。③便宜。方便。④具合。加減。⑤消息。」（『岩波古語辞典』補訂版）の意味があるが、承香殿女御の①歌からすれば、二人を架橋したのは漢籍であり、それが二人の接近の契機となっているからだ。それゆえ、「たより」は②の意味で理解すべきだろう。

さらに、②歌の「見る」については、宮中で承香殿女御が男君を一瞥した可能性はあるとしても、実際にこの時点で男君と直接的には対面したこ

とがないが、承香殿女御から男君にあてた閲覧希望の書名記載要請の返信を承香殿女御は見ていたはずであるから、㊦歌の「見るに苦しき」は「男君からの手紙を見るだけでも切なさを覚えて」と解すべきではなからうか。ちなみに、この個所は㊣では「お逢いしたら一層まともにお顔が見られないくらいに」、㊤では「あなたを見ると苦しくて」と訳されている。

〈7〉「十が一」―一九 男主人公と承香殿女御との密会

承香殿女御が里下りの折、男君が訪れて密会するわけだが、その後の状況は、

①ここ（注―承香殿女御）にはまして、月頃の下焚く煙は何ならず、時の間だに恋しくかなしく思さるるに、（男君ハ承香殿女御ノコトヲ）心に入れずは見えず、と折を過ぐさず訪れなどはし給へど、（男君ノ方ハ）こなた（注―承香殿女御）の御心ざしの十が「だにあらじとぞ見ゆる。（1・三三）

とある。承香殿女御の男君に対する恋慕と比較すると、男君の承香殿女御へのそれは十分の一以下であると語られており、傍線部はほんのわずかでしかないことを意味する。ちなみに、『日本国語大辞典』では中世作品の例文の記載はなく、「可能性、確率などきわめて低いこと。ほとんどないこと。ほんのわずか」と記され、

②彼の揚げ銭の参らせ物を、その身に十が一つも属げばこそなれ、皆親方の為なりかし。（たきつけ草（上）〈寛文七年＝一六七七刊〉）

③十が一ツ罪障消滅の便ともなれかしとて、……（昔話稲妻表紙・巻四〈文化三年＝一八〇六刊〉。脚注に「少しでも」の注あり）

の例文が取り上げられているところからすれば、江戸期に多く用いられたようであるが、『水鏡』（下・跋文）に、

④今、かく語り申すも、なほ、仙人の申ししこと、十が一とぞ申すらん

とあり、『水鏡』の成立が十二世紀末と考えられているところから、^注『風に紅葉』に先行する例となる。

注 『日本古典文学大事典』（明治書院 一九九八・6。『水鏡』の項目、海野泰男執筆）では、文治―建久年間＝一一八五―一一九九頃の成立かと記されている。

〈8〉『栄花物語』との関わり―二三 男主人公、聖を招請するため

に、難波へ下向・二五 男主人公と故権中納言の遺児若君との対面

男君は妹宣耀殿女御が第二子を懐妊し、重態に陥ったために、唐からやって来た靈験あらたかな聖を招請する目的で、難波に下向した、いわゆる道行文は次のように語られている。

①八月二十日余りの有明の月とともに、御舟に召す。鳥羽田の面、淀の渡り、^①長柄の橋の古き跡、今津、柱本ほどなく過ぎて、渡辺や大江の岸に着きぬれば、雲居に見ゆる生駒山など、^②ならず珍しう思す。（中略）心の塵をすすぐらん亀井の水を結びあげても、ものごとくに御心澄みつつ、かの聖尋ねさせ給へば、住吉に待るよし申せば、次の日ぞ御馬にて渡り給ふ。（1・三六―三七）

①「長柄の橋」は『古今集』に「世の中にふりぬる物は津の国のながらの橋と我となりけり」（雑上・八九〇・よみ人しらず）とあるように、「旧りぬ

る」と連動して詠まれてきたのである。さらには、㊤「渡辺や大江の岸」との「雲居に見ゆる生駒山」は合体して「渡辺や大江の岸に宿りして雲居に見ゆる生駒山かな」（後拾遺集・羈旅・五一三・良運法師）と詠まれ、㊦「亀井の水」は「濁りなき亀井の水を結びあげて心の塵をすすぎつるかな」（新古今集・釈教・一九二六・上東門院彰子）と詠まれている。

前述の地名を詠み込んだ道行文は『栄花物語』で二箇所語られており、ひとつは卷三十一（殿上の花見）に女院彰子が長元四年（一〇三二）九月二十五日に石清水と住吉に出立した後、天王寺に参詣し、

②亀井の水のもとに寄せたまひて、御覧するほどに思しめしける。

濁りなき亀井の水をむすびあげて心の塵をすすぎつるかな

と仰せられたりけんも、げにいとをかしくこそ。

とあり、さらに、天の河において関白頼通が「君が世は長柄の橋のはじめより神さびにける住吉の松」と詠歌し、また、弁の乳母（越後の弁の乳母・紫式部女）が「橋柱残らざりせば津の国の知らずながらや過ぎはてなまし」と詠歌したと語られている。

他の一例は卷三十八（松のしづえ）において、後三条院が天王寺と石清水に参詣後、住吉に詣で、左大弁経信が「沖つ風吹きにけらしな住吉の松の下枝を洗ふ白浪」（後拾遺集・雜四・一〇六三にも「延久五年（一一〇七三）三月に住吉にまゐらせたまひて、帰さによませたまひける」の詞書で所収された二首のうちの後の歌（注一前の一首は後三条院歌）として入集している）を詠歌したと語られている。ちなみに、この歌は『古今著聞集』（巻五・和歌第六・一七〇）にあり、「当座の秀歌なりけり」と記されている（『十訓抄』（第一〇・五）にも「当座の秀歌なり」とある）。また、因幡守忠季の歌「色ことに

今日は見えけり住の江の松の下枝にかかる白浪」が記され、『栄華物語詳解』下（明治書院 一九〇七・一）に「卷の名、此歌よりも出でたり」と論評されている（ただし、初句を「色ごとに」とする）。これらの二首は男君が故異母兄の遺児若君と対面する直前で語られている「松の下枝を洗ふ白浪、入海に作りかけたる釣殿、まことに心すごし」（一・三八）の傍線部に影響を及ぼしたものと考えられる。

以上のように、『栄花物語』における女院彰子と後三条院の二箇所における住吉参詣の記事が『風に紅葉』の該当個所に影響したのではないかと考えておきたい。

〈9〉 一七 男主人公、遺児若君を伴って帰京

男君は故異母兄の遺児若君と対面し、遺児若君を伴って帰京した後、北の方一品宮（以下、女君と称する）の所へ連れて行った件は、

①（男君ノ）御そばならずは、ただ一人寝んと（遺児若君ノ）のたまふ心苦しさに、また、「さらば、いざ」とて、（男君ハ）宮（女君）の御そばへも具しきこえ給ふ。終の果ていかがあらん。例のささしかるらん、この草子のと。（一・四一四三）

と語られている。傍線部には、桐壺更衣の死後、入内した藤壺のもとに桐壺帝が光源氏を連れて行ったところ、やがて光源氏は藤壺を恋慕するようになり、その結果、二人の間に密通が成立し、冷泉帝が誕生するという話筋が利用されていると考えられる。

さらに卷二において、男君は加行することになり、一人寝をしなければならぬ状況になった女君のことを考えて、遺児若君を女君のもとに行く

ようにけしかける。最初は拒否したものの、「さらでだに下安からず燃えわたる」(2・八四) 遺児若君は女君と情交に及ぶ結果となり、若君が誕生するが、女君は急逝するという構想と密接に脈絡することになる。

ところで、巻一卷末で男君が遺児若君に「色好み立てて、思ひ寄らぬ隈なく振る舞へよ」(1・四九)と言ったことに対して、中務の乳母が、

②「かく教へきこえさせ給はんに、まことに残ることあらじ。あまりなることは

さてしも果てぬならひにて、(男君ト女君トノ)御仲や悪しからん」など、……

(1・四九―五〇)

と返答したことが語られている。宣耀殿女御と遺児若君との初対面の際、宣耀殿女御が遺児若君の眉作りをした時、遺児若君が宣耀殿女御の手をなめ回したので、宣耀殿女御が眉作りをやめたことがあった。宣耀殿女御付きである中務の乳母が実際その場面を見たかどうかは明確ではないものの、後からその場にいた女房の大納言の君から聞いた可能性もあり、それを念頭に置いて傍線部のような発言をしたのではなからうか。それは遺児若君が将来男君の身近な女性との間で密通を引き起こすのではないかと危惧しているのと考えられる。度の過ぎたことは果てしがないと発言しているのだから、巻一卷末で、巻二後半部において展開される遺児若君と女君との密通↓女君の出産↓女君の急逝という話筋が予言の形で読者に提示され、読者を作中世界に引きつけておこうとしたのではなからうか。^注

注 男君が女君と遺児若君との間で就寝するということが語られており、それと相俟って、「今後の展開に期待をもたせる効果が計算されているように」と[A]が指摘している。

⑩ 三〇 弁の乳母の結婚騒動

「式部大輔といふ文章博士なりける末の子」(1・四五)は遺児若君に学問を教えていたが、遺児若君が男君に伴われて上京したために、失職して悲しんでいるので、遺児若君と再会させようとした際、男君は面会し、末子に今まで通り遺児若君に学問を教えるように取り計らった後に、寡婦であった遺児若君付きの弁の乳母を末子と再婚させようと計略をめぐらし、それが一応成功した折、男君が弁の乳母に向かって、

「いさとよ。古の頼もし人(注一亡くなった弁の乳母の夫)はさしも容貌のよかりしに、(末子が)あまり劣りたれば受けとらじと思ひて、逃がさじとてよ。

かまへてこの人(注一遺児若君)の御後見、真心にせよ。大方の乳母は、左大弁にてなんあるべき」など、この(遺児若君へ)御扱ひよりほかのことなし。

(1・四五―四六)

と語った件の傍線部に関して、「左大弁」は、弁官の最高位者に見立てて呼んだもの。ご機嫌とりをしているのである」[A]とする指摘がなされている。

ちなみに、桐壺帝が光源氏の将来を占ってもらうために、高麗人の相人のもとに「御後見だちて仕うまつる右大弁の子のやうに思はせて率てたてまつる」(桐壺)とある「右大弁」よりも上位の「左大弁」を男君が使用したのは、末子を結婚させようとして弁の乳母を不快にさせた一種のおわびの意味も含まれていると考えられる。

⑪ 三二 遺児若君と宣耀殿女御との対面

男君が妹の宣耀殿女御に遺児若君を対面させた際、男君が遺児若君に女君と宣耀殿女御とではどちらが美しいかを質問すると、女御の方が美しいと答えた後、

①『この人（注一宣耀殿女御）が誰よりもうつくしう思ひきこゆる』と申しはべるは、仲澄の侍従がまねやせんずらん。心の末こそ後ろめたけれ。なにがし

（注一男君）がやうにくづはれたる念なしにては、（遺児若君へ）よもあらじ。（遺児若君へ）あまり誇らかすほどに、痴れ者に生ほし立てつとおぼゆる」など、（男君ガ）笑ひきこえ給へば、……（遺児若君へ）ただ女のやうにてまことにうつくしう、^{なぶ}颯らまほしければ、（宣耀殿女御ガ）御手をばみなねぶりまほし給ふ。「か

せさせ給へば、（遺児若君ハ宣耀殿女御ノ）御手をばみなねぶりまほし給ふ。「かく性なくは、今はいろはじ」とて、大納言の君にせさせ給へば、「今はさせじ（宣耀殿女御ガ）御手づからせずは泣かんぞ」とて、（遺児若君へ）大納言の君の手をばへし除け給ふ。「宮仕へもしならはで、苦し」とて、（宣耀殿女御ガ）うち臥させ給へば、「さは、我も寝ん」とて、（宣耀殿女御ノ）御衣ひきやりて御そばに寝給ふ。（一・四六―四七）

と語られている。①「仲澄の侍従」は『うつほ物語』において同母妹貴宮に恋着した挙句、あて宮巻で悶死するという話筋である。男君は遺児若君との対面時に、『中納言のと言へば、なほ隔たりたるに、ただ殿（注一父関白）の御子となん披露すべき。さて心得て』（一・四〇）と男君は対世間的に遺児若君は父親の子であると語っている点から、宣耀殿女御と遺児若君とが異母姉弟（実際には二人は叔母と甥）を装っているのは、前述の

『うつほ物語』における仲澄と貴宮が同母兄妹であることと関連し、それを変奏させたものと考えられる。とすれば、仲澄が美貌の妹貴宮を恋慕したように、仲澄に該当する遺児若君が貴宮に該当する宣耀殿女御を恋慕する可能性が語られようとしたのではなからうか。

さらに再掲することになるが、男君が太政大臣の梅見の宴に招待された件は、

②「男君へノ）御賄ひを宮仕ひ初めにも、それや」と、大臣（太政大臣の上（北の方）に聞こえ給へば、（北の方ハ男君ノ傍ニ）居ざり寄りて、銚子取りて奉り給へば、大将（男君）居直りて、色許りて見ゆる女房を、「こちや。いかが、さることは」と（男君ガ）のたまへど、なほ、（北の方ハ女房ノ手ヲ）押さへて奉り給ふを、「さらば、また」とて受け給ふほどの（男君ノ）御気色、（北の方へ）ただ死ぬばかりぞおぼえ給ふ。（一・二〇―二一）

と語られており、状況は異なるにせよ、前述の②③④は、⑤⑥と表現上類似しており、この引用文の直後に男君と北の方との情交が成立するのである。とすれば、この梅見の宴の場面との共通性を考えると、仲澄の引用のことと相俟って、遺児若君と宣耀殿女御との密通が想定される可能性がある。注それは男君と北の方との情交に至るまでの過程を変奏させたものではあるが、〈性〉を濃厚に浮き彫りにしようとする本作品の特徴を端なくも現出しているといえよう。

注 宣耀殿女御の傍に遺児若君が添い寝をしている様子を女房たちが男君に知らせた件の、『女の姿ならんほどは苦しからねど、もの忘れせざらんこそよしなけれ』（一・四八）という男君の発言は、「若君がやがて宣耀殿

を恋の対象として意識し始めることを危惧する」(A)ものとの指摘がある。

(巻二)

〈12〉 一 男主人公の父関白への諫言

巻二冒頭において、男君が父関白に対して次のような提言をしたことが語られている。少々長い引用となるが、

①「かの太政大臣の、すでに六十に及び給ひぬるが、なほ朝廷の御後見なん、心にかかることけにはべる。故大殿(注一関白たちの父親)のこなた(注一父関白)へ譲りきこえ給へりけることは、恐れながら御僻事にこそはべりけれ。ひと日も内裏にて、なにがしをとく揺るぎなくなしてみたきとかや奏せさせ給ひけるよし承る。かへすがへす当時あるまじきことになん。君(父関白)は四十にこそみたせ給へば、さは言へど御行く末おはします。かの大(太政大臣)の、いつの世を待つともなき頭の雪のつみ深うなん見給ふる。さて一宮(注一母は宣耀殿女御)坊に立たせ給ひ、女御、立后など侍らん御栄華の頃、(父親ガ関白ニ)返りならせ給ひて、いつまでも御保ちはべれかし」と聞こえ給ふに、げにも、この風情(注一男君が父親に対して兄に関白職を譲るように提言したこと)思ひ寄りざりけり。親なれど、我が心はむげに言ふかひなしかし。(男君ガ)かやうにのみあまりこの世の人にあまり給へる御やうを、かへりては危なく、(父関白ハ)空恐ろしくさへ思して、うち泣かれ給ひぬ。(男君ハ)「さかしきやうなれど、せめて御世も久しからんためになん、思ひ寄られはべる」とて、これ(注一男君)もうち泣かれ給ふ。上も、「例のこの大将(男君)の計らひならん。なべてならぬ人のさまかな」とぞ仰せらるる。大方、さ披露はなけれ

ど、あまねくさなん人の思ひける。(2・五三一五四)

とある。男君は父関白に六十歳を越えている兄の太政大臣の年齢を考えて、一旦関白職を兄に譲り、宣耀殿女御腹の一宮が東宮に就き、女御も立后した暁に、再び父親が関白職に戻ればよいと提言したのである。この提言を耳にした帝は男君を賞讃し、関白に就任した兄も「ものに当たりて喜び惑ひ給ふ」(2・五四)点から考えると、父親にこのような提言をした男君の卓越性が強調されていたのだといえよう。そのうえ、男君が年末から加行に入ることを父親に知らせると、父親は「あな、あさまし、と思し驚かるれど、怖ぢきこえ給ひて、心のままにも申し給はず」(2・八一―八三)と語られている^{注①}。傍線部のごとく、父親が男君を畏怖しているのは、前述の関白職譲渡提言の件が関係しているのだと考えられる。さらに、男君が自身の官職を返上しようと父親のもとを訪れた件は、

②(父親ハ男君ノ官職返上ヲ)恨めしうあるまじきことに聞こえ返し給へど、(男君ガ)げにげにしう聞こえ給ふことをば、え否びきこえ給はぬならひになりおきにければ、力なきことにて、……(2・一〇七)

とあり、傍線部のように、道理にかなったことを言う男君に対して父親は拒否できず、男君の父親をも凌駕する状況が語られている^{注②}。それは巻二冒頭から続いている図式なのだ。巻二冒頭部で、男君の素晴らしさが賞讃されているのは、巻一において例えば、『苦しきに、いざ休まん』とて、(男君ガ遺児若君ヲ)かき抱きて臥し給へば、疎く恐ろしげも思はず、うち笑みてかいつきて寝給」(1・四〇―四一)うた結果、男君が遺児若君の身に触って、「身なりなど磨けるやうなる手触り、女のさまよりもをかし

げなり」(1・四一)と感じ取ったと語られている点に表象されるごとく、遺児若君と同性愛に耽る男君を相対化しようとする意図があったのだ。もちろん、巻二にも「例の隔てなく臥し給ひつ」(2・七二)のような同性愛的描写もあるが、男君が遺児若君に対して女性への心構えを説いた後、男君は「親をだに従へきこえ給へれば」(2・六二)と語られている点からも、「男君∨父内大臣」という関係が強調されており、巻二冒頭で男君への賞讃が語られている意味の重要性を看過してはなるまい。

ところで、中世王朝物語に属する『恋路ゆかしき大将』巻一で、「恋路の父関白左大臣が兄の吉野山の致仕の大臣に関白職を譲る話と似る」(B)という指摘がなされているが、『風に紅葉』と『恋路ゆかしき大将』の二作品は、『無名草子』や文永八年(一二七二)成立の『風葉集』にともに記載がなく、両作品の前後関係は明確にしがたいものの、子の親に対する提言は以下に述べるごとく、『源氏物語』以前に存在する。

ちなみに『うつほ物語』(蔵開・中)では、仲忠が父兼雅に妻の一人である嵯峨院の皇女女三宮に対して手厚い処遇を施すように説得し、また、仲忠が父親に女三宮引き取りを提言したことに対して、仲忠の母で兼雅の妻である俊蔭女が、

③「何か。ここには、年ごろ(兼雅ガ)かくてもなし給ふに、(兼雅ノ)御心ざしは見つるを、今は、(俊蔭女ヲ)忘れ給ふとも、思ふべくもあらず。ましてそこ(注一仲忠)に、かく聞こえ給はむことは、よきことになむ」

と引き取りに同意しており、「女三の宮を三条殿に迎える用意が、仲忠主導で進められる。消極的な兼雅を説得し、本意を遂げてゆく仲忠は、すでに政治的において父親を凌ぐ存在であることを証明する」^{注③}と指摘されてい

るように、子の提言が父親を動かすのである。とすれば、『風に紅葉』とは次元を異にしているが、『風に紅葉』との共通性をうかがうことができよう。さらに蔵開・下において、兼雅は俊蔭女に、

④「いさや。そこ(注一俊蔭女)を見つけ奉りしに、胸・心もつぶれて、よろづのことおぼえざりしかば、知らざりつるにや。この中納言(仲忠)の言ひ出で、かうして、忘れたりつる見苦しきものども思ひ出でさするにこそは。いかに訪ひに遣らむ。食物などこそ、いとあはれなりしか」

と述べているわけだが、女三宮引き取りの件に触発されて、兼雅は妾である故式部卿宮女の中君の面倒を見るようにもなったと語られている。それは俊蔭女の仲忠に対する「親・君と頼み奉るわが子」(国譲・下)という発言が仲忠の立ち位置を表象しているのであり、親を凌駕する仲忠の傑出性が浮き彫りにされているといえよう。そのことは「ややもせば枝さしまさるこのもとにただ宿木と思ふばかりを」(楼の上・下)という兼雅歌によっても理解される。傍線部「こ」に「木」と「子」がかかけられ、波線部「宿木」は兼雅自身を比喻しており、「宿木」とは「他の樹木に寄生した木」(『岩波古語辞典』補訂版)という負的状态を示すことばであるという点からも、兼雅は息子の仲忠の方が秀でていると認識しているのであって、息子に対する親の劣位性が宣言されているのだと考えられる。

さらに、親が子の提言を受けて、それを実行するという点では若干異なるが、『落窪物語』において、継母から(へいじめ)を受けた落窪姫君(以下、姫君と称する)の夫道頼は姫君の継母たちへの報復後、姫君の父親に孝行しようと考え、父親のために法華八講や七十賀を挙行する。巻四冒頭で姫君の父中納言が重病となつて、大納言昇進を希望しているのを道頼が

聞き、姫君も「『いかで（父親ヲ）大納言をがな。（大納言ニ）一人なしたてまつりて、飽かぬことなしと思はせたてまつらむ』」と言うのを道頼が聞いて、姫君の父親を定員外の大納言にすることは困難であるとともに、他の大納言の官職を取り上げることができないので、道頼は自身の大納言職を譲りたい旨を父内大臣に打診したところ、

⑤「何かはさ（注―道頼が自身の大納言職を姫君の父親に譲ること）思はむを。はやうさるべきやうに奏を奉らせよ。（道頼ハ大将ヲ兼任シテイルカラ）大納言はなくてもあしくもあらじ。わが心なる世なれば」と（父内大臣ハ）思してのたまへば、（道頼ハ）限りなく喜びたまひて、申して、奏奉らせたまひて、中納言、大納言になりたまふ旨ぐだしたまひつ。これを聞きて、大納言（注―姫君の父親）わづらふ心地に泣く泣く喜びたまふさま、親にかく喜ばれたまふに、功德ならむと見ゆ。

と語られている。とすれば、これは道頼の孝行であるわけだが、道頼は自身の大納言の地位を姫君の父親に譲りたいという旨の提言を父内大臣にして、父親もそれを承認している点からも、『風に紅葉』に関連するものと思われる。

以上のように、『風に紅葉』における子の親への提言とその受け入れという話筋は、既にその原型が平安前期物語の『うつほ物語』と『落窪物語』に存在し、『風に紅葉』の該箇所はこれら二作品の影響を受けて、変奏しながら語られていると考えられよう。^{注④}

注④ ① ②において、「何を「怖ぢ」たのか、ややわかりにくい。内大臣のこれらの不幸を恐れているのか、何を言っても息子の方が一枚上手だから詮

ないというような気持か」と指摘されている。
② ③は「父閑白は息子の内大臣の言動に対してまったく無力である」と指摘している。

③ 新編日本古典文学全集『うつほ物語』②頭注。

④ 『うつほ物語大事典』（勉誠出版 二〇一三・二）「他作品への影響」の項目（中世王朝物語は勝亦志織執筆）において、『いはでしのぶ』『石清水物語』『恋路ゆかしき大将』『風に紅葉』『八重葎』に対する『うつほ物語』の影響が取り上げられているものの、『風に紅葉』に関しては仲澄の指摘だけであり、当該個所の指摘はなされていない。

⑬ 六 新関白北の方への贈二品

殿の上（注―新関白北の方）は二品の位賜りて、中宮（注―もとの梅壺女御）の御母の儀式にて、輦車許りて参りまかでし給ふに、隈なき上は御覧して、限りなう御心移させ給へりけるよし、内大臣（男君）も聞き給ひて、をかしう思しけり。（二・五七）

傍線部は『夜の寝覚』における女主人公中君が結婚した老関白の前妻所生の長女尚侍の付き添いとして参内した折、帝の目にとまり、中君を恋慕して、闖入事件に至った話筋がこの個所に影響を与えているのではなからうか。さらに、中君と新関白北の方にとっては尚侍と中宮とは各々義理の親子関係であるという類似性も考えておくべきだろう。

⑭ 一四 男主人公の故式部卿宮の姫君への恋慕

男君は承香殿女御の里邸で可憐な故式部卿宮の姫君（以下、姫君と称する。承香殿女御の異母妹）を発見し、恋慕する。女房の口から、姫君は承香殿女

御所生の女三宮と一緒に住んでいたが、好色な朱雀院にその存在が知られて、『煩はしきこと出で来はべ』(2・七〇) ったために、この里邸の西の対で暮らしていることが語られている。男君が姫君を発見した際、姫君は「薄色の衣のなよかなるを着て」(2・六五) おり、「十一、三ばかりなる童と、また若やかなるとぞ、前に居たるも、なよかなる姿どもご覧じもならず、あはれげなり」(2・六六) と男君の視線から語られている。そのことは「この女たちが冷遇されていることを暗示する」(B) と指摘されているように、貧しい生活を送っていると考えられるが、男君が姫君を訪れた二晩目の帰り際に、

我が下に着給へる白き御単衣を、「この暮れまでの形見に」とて、(男君が姫君
ニ) 着せたまつり給ひて、女の御単衣の袖の綻びてまとはれ出でたるを取
り給ひて、……(2・七〇)

と語られている傍線部に、姫君の単衣の袖が破れるほどの男君の激しい情交が暗示されているのではなからうか。というのは、男君は一品宮という帝の娘と結婚し、愛着を感じてはいるものの、それは帝からあてがわれたものであり、一面屈辱を感じていたと考えられるからである。ところが、この姫君は男君の方から接近したのであり、女君への屈辱感を払拭しようとして、姫君との情交に激しく燃えた結果、姫君の単衣の袖がほころびたのではないのか。

ちなみに『とはすがたり』巻一において、二晩目に後深草院に犯された二条は「今宵はうたて情けなくのみあたりたまひて、薄き衣はいたくほころびてけるにや、残る方なくなりゆくにも」と語られているわけだが、そこには一方的にせよ後深草院の二条に対する激しい〈性〉の暴発が示唆さ

れている。もちろん事情は異なるにせよ、『とはすがたり』との類似性が指摘できるのではなからうか。^注

注 『とはすがたり』との共通性に関しては、大倉『物語文学集放—平安後

期から中世へ—』(新典社 二〇一三・二) の第三部の三で触れておいた。

15) 男君の形見の単衣—一九 故式部卿宮の姫君、承香殿女御里

邸から東山へ転居・二〇 故式部卿宮の姫君、三輪へ移居

故式部卿宮の姫君は男君との関係を異母姉承香殿女御に知られた結果、男君への恋慕に苦しむ承香殿女御の嫉妬のために、里邸から追放され、東山に住む尼上のもとに転居することになるわけだが、姫君はかつて男君から贈られた単衣を「いづくにも形見の御単衣をば身に添へ給へり」(2・七七) と語られ、尼上が三輪に行くのにつけて、姫君も随行することになる。三輪への移居直前に、姫君は男君の面影を想起して、「ただありし(男君ノ) 御単衣の匂ひの、いまだ変はら」ないのにつけて、「脱ぎ捨てし小夜の衣の匂ひだに命とともに変はらざらん」(以上、2・七八) の歌を詠む。このように、姫君は男君の形見の単衣を四六時中身につけていることから、それは男君への愛の永続性を意味していると同時に、男君との二晩目における激しい情交を忘れかねて、男君との〈擬似共寝〉を希求しているのではないのか。現実的には男君との情交は不可能であるがゆえに、肌身離さず男君の単衣を身にまとうことによって、男君の残り香を噛みしめているのだ。それは男君との情交の代償行為であると理解されよう。

16 一三三 男主人公、梅壺皇后を訪問

男君は加行に入るために、梅壺皇后に挨拶に訪れた件は、

鳥の音、鐘の音おともうちしきるに、(男君が梅壺皇后ヲ)端っ方へ誘ひきこえ給ひて、妻戸を押し開け給へれば、入り方の月隈なうさし入りたるに、御髪④のかり、分け目、かんざしなどは、わざともめでたう見え給ふに、限りなく世を、あはれ、と思ひ入り給へる御気色、いみじう心苦し。(2・八一―八二)

と語られている。傍線部④の「御気色」は誰の様子であるのか、男君(B)と梅壺皇后(D)の二説あるわけだが、「きぬぎぬの別れの袖に霜冴えて心細しや暁の鐘」(2・八二)の歌を梅壺皇后の方から先に詠みかけているのを考えると、④は梅壺皇后と解すべきだろう。というのは、以前継母北の方から恋慕している男君の太政大臣邸への来訪予定を聞いて、急遽里下りをし、継母の手引きにより男君と密会して以降、男君に首ったけであったからだ。さらに、傍線部④では素晴らしい梅壺皇后の髪の様子が語られている一方、④では男君が加行に入れば恋慕する男君と密会でなくなるのを悲嘆している梅壺皇后の内面が対照的に語られていると理解すべきだろう。とすれば、「御気色」は梅壺女御と考えるのが妥当なのではなからうか。

17 五二 新年、父関白と遺児若君、男主人公を訪問(共編著では「五三」となっているが、「五二」の誤りなので、訂正する)

卷二の巻末近くに朝拝の折、男君のもとを訪れた父関白の詠歌「たち変はる春の気色もかひなきは君を隔つる霞なりけり」に対する返歌「ほどもなく霞の衣たち出でて君が光に会はざらめやは」(以上、2・一一三)を詠

んだのは誰であるのかに関して、「内大臣(私云―男君)の歌でありたいところだが、内容からは大将(私云―遺児若君)の歌と見るべきか」(B)と理解しておくべきだろう。続けてBは「ほどもなく」の歌について、「三箇月の一品の宮の服紀は、十二月で果てているはずなので、内大臣が喪服を脱ぐ意にはとれない。下句は、内大臣の復帰を信じての言」とするが、九月二十日の一品宮の急逝後に、「姫君には御服も召させじ」と、殿(関白)ののたまはずれば、(男君ハ)わが御身のみ殿には隠しきこえ給ひて、黒く染め給へり」(2・九四)と語られている点からすれば、男君は女君を思うゆえに通常の喪服よりも色濃く染めたのであり、それを男君の分身である遺児若君は承知しているものの、男君が悲しみにくられてこのまま落ち込んでいく状況を危惧して、再び男君が今までのように輝く存在であってほしいと、遺児若君が湿りがちである場を取りつくるおうとして歌を詠んだものと解したい。

* * * *

『風に紅葉』以外の本文は次のものによったが、一部私に表記を改めた個所のあることを御断わりしておく。

『恋路ゆかしき大将』―中世王朝物語全集。『今鏡』『梁塵秘抄口伝集』―講談社学術文庫。『百座法談』―佐藤亮雄校註『百座法談聞書抄』(南雲堂校楓社 一九六三・9)。『古今著聞集』『曾我物語』―日本古典文学大系。『蜻蛉日記』『落窪物語』『源氏物語』『栄花物語』『催馬楽』『十訓抄』―新編日本古典文学全集。『古今集』『後撰集』『後拾遺集』『新古今集』『昔話稲妻表紙』―新日本古典文学大系。『たきつけ草』―日本思想大系(近世色道論)。『水鏡』―新典社校注叢書。『うつほ物語』―室城秀之『うつほ物語』(おうふう)。

(おおくら ひろし 日本語日本文学科)